

時代		年次	年齢	事柄
江戸	誕生	文久3年	1歳	徳富一散(淇水)・久子の第5子長男として熊本に生まれる 本名・猪一郎 徳富家は代々惣庄屋を務めた豪農
明治	同志社英学校時代	明治元年	6歳	弟・健次郎(蘆花)生まれる
		明治6年	11歳	熊本洋学校に入学
		明治9年	14歳	熊本洋学校閉鎖により東京英学校(第一高等学校の前身)へ入るが、満足できず新島襄の同志社英学校(京都)に入学
	大江義塾	明治13年	18歳	同志社英学校を卒業直前に自ら退学、熊本に帰る
		明治15年	20歳	大江村(熊本)の自邸にて大江義塾を開き、自ら塾長を務める
		明治17年	22歳	妻・静子を迎える その後4男6女をもうける
	ジャーナリスト	明治19年	24歳	『将来之日本』を刊行、その好評により大江義塾を閉鎖し、一家をあげて上京する
		明治20年	25歳	民友社を設立し、総合雑誌『国民之友』を創刊
		明治23年	28歳	『国民新聞』を創刊し、藩閥政治を批判 平民主義を唱く この年1月、新島襄が大磯にて永眠
		明治27年	32歳	日清戦争で国民新聞社は戦況を総力取材 30名近くの従軍記者を派遣した
		明治28年	33歳	三国干渉を機に軍備の必要性を訴え、180度転換し富国強兵・国家主義を唱える
		外遊	明治29年	34歳
	転機	明治30年	35歳	帰国後、松方内閣の内務省勅任参事官に就任 "変節漢"との非難を浴びる

大	政界 参画	明治 31 年	36 歳	『国民之友』『家庭雑誌』『欧文極東(THE FAR EAST)』の3雑誌を『国民新聞』に併合する
		明治 37 年	41 歳	日露戦争勃発 桂太郎首相の委嘱を受け国論の統一に尽力する
		明治 38 年	43 歳	日露戦争講和条約締結の支持をし、国民新聞社は焼打ちに遭う
		明治 43 年	48 歳	日韓併合にともない、朝鮮総監・寺内正毅の要請で『京城日報』監督」の任に就く
		明治 44 年	49 歳	桂太郎首相の推薦で貴族院議員に勅任される
大 正	歴 史 家	大正 2 年	51 歳	桂太郎の新政党を支持した国民新聞社は2度目の焼打ちに遭う 10月の桂の死により政界から離れ、新聞事業に専念する
		大正 7 年	56 歳	『近世日本国民史』を起稿
		大正 12 年	61 歳	『近世日本国民史』10巻で帝国学士院より恩賜賞授与 関東大震災により国民新聞社、民友社全壊被害を被る
		大正 15 年	64 歳	国民新聞社 財政立直しのため東武電鉄・根津嘉一郎の出資を仰ぐ
昭 和	文 章 報 国	昭和 4 年	67 歳	根津との不和から国民新聞社を退社
		昭和 17 年	80 歳	太平洋戦争時『日本文学報国会』『大日本言論報国会』の会長に就任、言論による翼賛体制の一翼を担った
	昭和 18 年	81 歳	文化勲章受章 終のすみかとなる熱海・晩晴草堂へ移る	
	戦 後	昭和 20 年	83 歳	終戦後、自ら戒名を「百敗院泡沫頑蘇居士」と記す A級戦犯容疑者に指名され、閉門蟄居の身となる
		昭和 21 年	84 歳	高熱と持病(三叉神経痛)のため、自宅拘禁となる 家督を譲り、貴族院議員や文化勲章など一切の公職を辞退する
昭和 22 年	85 歳	A級戦犯容疑者、自宅拘禁解除		

		昭和 23 年	86 歳	静子夫人永眠、享年 82 歳
		昭和 27 年	90 歳	公職追放解除される 『近世日本国民史』 100 巻完成 郷里水俣へ最後の墓参
	逝 去	昭和 32 年	95 歳	11 月 2 日、熱海の晩晴草堂 で逝去 遺言により赤坂霊南坂教会にて葬儀が執り行 われた